

氏名	姫 宇恒
授与した学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 7422 号
学位授与の日付	令和 7 年 9 月 25 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則第 4 条第 1 項該当)
学位論文の題目	並列表現の史的展開と諸相 —引用・疑問形式由来の「トカ」「トヤラ」を中心に—
論文審査委員	教授 (主査) 宮崎 和人 准教授 京 健治 准教授 久保薗 愛 教授 堤 良一

学位論文内容の要旨

本論文は、「…当分、夜はアルコールとか薬とか、意識を失いやすくなるものは口にしないことね。」(『R-0 amour』柴田よしき・祥伝社 2001)、「さし当って困ることは界隈の料理屋仲間が、わたしの足を引っ張ろうとたくさんしたことかも知れないが、笹川の主人は身分がいやしいとやら吝嗇とやら、得体の知れない人間だとやら言いふらしている。」(『桃色月夜』梅本育子・集英社 1991)のような、助詞「ト」を構成要素とし、候補を挙げる用法と例示用法を持つという特徴を共有する「トカ」「トヤラ」による並列表現の歴史的な展開過程について考察したものである。用例の収集には、中納言『日本語歴史コーパス』、史記抄(『抄物資料集成』清文堂)、蒙求抄(『抄物資料集成』清文堂)、嘶本大系(東京堂出版)などの資料を利用した。

本論文は、研究の目的、並列表現の研究史、「トカ」「カ」「トヤラ」「ヤラ」の先行研究、本研究の立場、本論文の構成について述べた序章、「トカ」の歴史的な展開過程を考察した第一章、「トヤラ(ン)」の歴史的な展開過程を考察した第二章、「トヤラ」と「ヤラ」の関係について考察した第三章、結論と課題をまとめた終章からなる。以下、本論に当たる第一章～第三章の考察内容について述べる。第一章では「トカ」の歴史的な展開過程について考察し、以下のようなことを明らかにした。「トカ」の二つ(以上)の要素を挙げる用法は中世後期に出現する。発生初期(中世後期～近世前期)には、「A トカ B トカ」「A トカ B トコソ」の形式の選言用法、「A トカ B トカ」の形式の疑問用法が見られる。近世前期においては、「A トカ B ナドトコソ」のような「ナド」を加えた形式が見られ、A と B 以外の要素が存在することを表すようになる。中世・近世前期の「トカ」の例には、何かを選んだり、変更したり、決定したりする際の例を挙げる文脈で使用されたものが多い。「トカ」の例示用法の例は近世前期に出現しており、引用的な性質を維持しつつ意味的に例示に使用されていた時期があり、その後、引用から完全に脱却し、純粹な例示形式に発展した。近世後期には、「A トカ B トカ」形式で候補を挙げる用法と「A トカ B トカ+N」の形式で N の例として A、B を並べる例示用法が共存する。この時期の候補用法は、例示用法と同じく、A や B 以外の要素の存在を意味する。明治期以降は、例示用法の例が多く見られるようになり、定着した。伝聞用法は近世後期から見られるが、明治期以降には「A(肯定形) トカ(否定) トカ」の形式で噂を表す用法も見られるようになる。

第二章では、並列形式「トヤラ(ン)」の歴史的な展開過程を考察し、次のようなことを明らかに

した。「A トヤラ(ン) B トヤラ(ン)」の形式の並列用法は、近世前期前半から見られるが、この時期はまだ候補を挙げる用法が中心で、引用に由来する例と引用から離れた例が共存していた。引用から離れた例が中心になるのは近世前期後半になってである。また、この時期には例示用法がごくわずかだが見えはじめる。近世後期もまだ候補を挙げる用法が中心であるが、「A トヤラ何トヤラ」という新しい形式が登場し、伝聞用法に用いられる。例示用法はこの期も少ない。明治期には、「トヤラ(ン)」自体が衰退し、明治後期以降は候補を挙げる用法の例はほぼなくなる。例示用法の例は見られるが、依然少数である。

第三章では、並列形式「トヤラ(ン)」と「ヤラ(ン)」の関係について考察し、以下のようなことを明らかにした。並列形式としての「ヤラ(ン)」は、中世前期に疑問用法で出現し、近世前期までこの用法でよく使用されている。中世後期になると、候補を挙げる用法が一時的に見られるが、ごくわずかである。近世には、例示用法が発生し、この用法で多く使われていた。並列形式としての「トヤラ(ン)」は、近世前期から見られる。初出例は候補を挙げる用法であり、近世期を通して、この用法で使用され続ける。例示用法への拡張も見られるが、少ない。「ヤラ(ン)」と「トヤラ(ン)」にはある程度の役割分担があったと見られる。前者は早い時期に疑問用法を中心に使用され、後者はやや遅れて候補を挙げる用法を中心に使用された。近世における例示用法への展開は、いずれの形式にも見られるが、「トヤラ(ン)」は「ヤラ(ン)」ほど活発ではない。

終章では、本研究が明らかにしたことをまとめ、「トカ」「トヤラ(ン)」の単独用法に関して簡単な補説を付し、最後に今後の課題を提示した。

論文審査結果の要旨

本論文は、引用助辞「ト」+疑問助辞という構成をもつ点で共通する並列形式「トカ」と「トヤラ」による並列表現の歴史的な展開過程を用例調査にもとづいて実証的に考察したものであり、本論部分（第一章～第三章）では、「トカ」の歴史的な展開過程、「トヤラ（ン）」の歴史的な展開過程、「トヤラ（ン）」と「ヤラ（ン）」の関係性について論じている。用例の収集にあたっては、日本語歴史コーパスを中心に、『史記抄』（『抄物資料集成』）や『蒙求抄』（『抄物資料集成』）、『嘶本大系』を利用している。

本論文が対象とする並列形式は、岩田（2010）が「例示並列形式」に分類する並列形式の中の「引用句を基盤にして用法が拡大していく」「名詞句としての用法を中心に発達した」という変化の過程をもつグループに所属する。このグループの代表は「トカ」であり、その歴史的変遷についてはすでにいくつかの先行記述があるが、申請者は、このグループに新たに「トヤラ」を加え、これが「トカ」とはまったく違った変遷を辿ったことを明らかにしている。結論として、「トカ」は選言用法から出発して例示用法へ大きく展開するのに対して、「トヤラ」は候補用法から出発しながら例示用法への展開が十分には見られないこと、また、「トカ」が例示の並列形式として代表的な地位を占めるのに対して、「トヤラ」は並列形式としては明治期以降衰退してしまうことなどを広範な資料の調査を通じて明らかにした。さらに、「トヤラ」がこうした変遷を辿ることの背景として「ヤラ」の存在があり、「トヤラ」は「ヤラ」とほぼ同時期に例示用法を生じさせるものの、その後、「ヤラ」の例示用法が急速に発達するのに対して、「トヤラ」の例示用法への展開は抑制され、両者は例示用法と候補用法を分担する関係にあったと推定する。この議論には説得力があり、評価できる。一方、かなり詳細な先行記述が存在する「トカ」については、基本的な部分で新しい事実を提示できているわけではないが、申請者なりに、一語化の過程や後続形式、文脈に注目したり、独自の用法分類を行ったりしている。使用文脈や後続形式に関する特徴を詳細に分析している点も、本論文の特徴といえる。

そのほか、審査会では、予備論文からの大きな修正点として、やや雑多な内容になりかけていた予備論文に対して、考察範囲を思い切って絞り、飛躍や冗長さを解消する方向で仕上げを行ったことで、論文の性格がはっきりしたというコメントや、表が大幅に増えていることに対して、表は考察に使用するものに絞るべきであるとか、調査結果の概要としての表なら序章に提示すべきであるとかのコメントがあった。また、候補用法といった先行研究では立てられていない用法を立てている点に本論文のオリジナリティーがあるといえるが、だからこそ、その定義や分類基準についてはもう少し説明が必要ではないかといった声もあった。さらに、今後の課題として、明治以降、ヤラがどう変化していくかということや、トヤラがなぜ衰退したかということなど、現代語につながる道筋を明らかにしてほしいといったコメントがあった。

上記のような問題点や課題も見られるものの、本論文は、並列表現に関する従来の研究に対して新たな知見を提供し、この分野の研究の発展に寄与するものであることは間違いない、審査会では、全員一致で学位授与に値すると判断した。